家族研究の歴史とその機能の歴史的考察
ー我々の家族論を部分的に補完する Todd の「家族システムの起源」ー

沖縄国際大学非常勤講師　末吉重人（社会学）
宗教社会学修士（U.T.S.）、社会学修士（沖国大大学院）
社会福祉士、精神保健福祉士、法務省人権擁護委員、那覇保護観察所保護司

2017 年 7 月 22 日（土）

１、はじめに

家族は社会学においては重要なテーマであり、家族社会学との分野があることからもそれは自明である。しかし現在の家族社会学では、家族の定義すら難しい、あるいは意味をなさないとの立場を取る学者や、家族に対して否定的な立場の学者が増えている。現代社会を支える最小単位は家族であるとの「古典的」ではあるが、いまでも有効だと考える筆者の視点に立てば、そこからは家族に対する有力な応援材料は提供できない。

もちろん、そうした視点がアナクロニズムとの批判を受けることは承知している。しかし、本稿では社会を支える最小単位は家族であるとの立場から、現代家族が抱える課題をいくらかでも支援できる視点を求めて、家族研究の歴史を振り返りながら模索してみたい。2016 年評判になったエマニュエル・トッドの『家族システムの起源』（藤原書店 2016 年 7 月 10 日石崎晴己監修訳）が参考になる。

２、『家族システムの起源』への若干のコメント

「人類の起源的家族形態が核家族である」ことを触れ込んだキャンペーンにやや違和感を覚えつつも、『家族システムの起源』を読んで先ず気になったのは、下巻表紙裏のキャッチコピーである。それは以下のようなものであった。「核家族が最も古い形態であるとするトッドの命題は、果たして世界の、少なくともヨーロッパの人類学に衝撃を与えた。というのも、これまでのヨーロッパの常識は大家族（例えば家父長に支配される）が最も古い形態であり、核家族とは近代に近づく中で生まれて来た、すぐれて近代的な家族形態である、というものだったからである。トッドの立場は、その先入見を引っくり返したわけである」。

トッドはフランスの家族人類学者で 1951 年生まれの今年 66 歳。フランス国立人口統計研究所に属している。統計学的手法を用いて、家族の研究を行っている。同著の著者紹介では、弱冠 25 歳にて『最後の転落 - ソ連崩壊のシナリオ』にて当時の大勢に反してソ連の崩壊を予言したこと（詳細後述）がものものしく紹介されている。その理由は 1970 年から、通常の先進国では下がり始める乳幼児死亡率が増加に転じ始めたことにあったという。1991 年のソ連崩壊以降、アメリカが唯一の超大国になった。そのアメリカにイスラム教徒が行ったテロである 9.11 テロから一年後の 2002 年 9 月、トッドは『帝国以後』を出版、

アメリカも同じ崩壊の道を歩んでおり、衰退しているとして同著は 28 カ国語に訳されるベストセラーとなった。

簡単にトッドの同著の位置付けを行いたい。家族研究においては、原初の家族が大家族（部族）であったか核家族であったか、果ては乱婚時代（インセストタブーがどのように存在したか等）があったかどうかの論争がかつて存在した（詳細は後述）。この論争にある程度の終止符を打ったのはアメリカの人類学者ジョージ・マードックの『社会構造』（原著 1949 年、訳本 1976 年）であった。マードックは同著において、核家族が普遍的な家族形態であるとの結論を下し、女系家族等が歴史的に存在していたことを否定したのである。しかしこの説がヨーロッパでは否定されることになった。

ヨーロッパにおいては歴史学においてアナール学派が、従来の勝者の歴史を形成した公的な歴史資料ではなく、民間人の歴史文書（手紙や墓碑等）を根拠に、庶民の歴史を記述する努力を行った。その展開は家族史にも及び、フィリップ・アリエスの『子どもの誕生』（原著 1960 年）などが刊行された。その言わんとするところは、現代のような子どもに対する親や家族の愛情は、近代に発するものであり、それ以前には存在しなかったというものであった。この指摘をとらえて、核家族は資本主義社会を支えるものとして否定するマルクス主義フェミニズム等が、~~近代家族である~~核家族は~~、~~近代の産物であり、普遍的な存在ではなかったとの主張を繰り広げた。つまりマードックの視点を否定したのであった。

マードックの核家族論が人類に普遍的なものではないとして普遍性が否定されると、家族には多様な形態があるとの主張が芽をもたげて来る。たとえば未婚、同棲、同性婚などである。機能主義社会学において重視される、家族は子どもを産み育て、社会を支える機能があるとの視点がかすんで来る。

こうしたマルクス主義フェミニズムの立場が、少なくともヨーロッパにおいては正統になったとの前提で、トッドの著書を紹介した出版社は、これを覆す著書として『家族システムの起源』を紹介したのである。しかし筆者の見解では、アリエスの『子どもの誕生』ではマードックは否定しきれていないように思われる。簡潔に言えば、アリエスの主張は、家族の親密性が近代の産物であるということであって、核家族自体が近代の産物であるとは言っていないということである。つまりマルクス主義フェミニズムはアリエスを拡大解釈し、自らの主張（核家族に普遍性はない）の裏付けとしようとしたと考えるべきなのである。

トッド自身一時、フランス共産党の細胞として活動していた過去があり、マルクス主義にも精通している。そうした学者が、核家族の普遍性を再確認した意味は大きく、トッドの同著は家族機能の再生・強化を望む人々にとっては強力なバックアップとなる。綿密に言えば、トッドの見解はマードックの主張の補強になっているのである。

そのことについて、トッド自身も次のように述べている。「本著…は、方法論の面では革命的な著作であると称するものではない。実のところ方法論的には、1920 年から 1945 年のアメリカ人類学を、そして特にロバート・ローウィを新たな装いで踏襲しているにすぎ

ない」[1]。そして「夫婦とその子供のみからなる核家族の普遍的にして、言わば原初的な性格は、すでに（筆者注：ローウィによって）主張されていることが見いだされる」とし、「その 20 年後、ジョージ・ピーター・マードックは、この結論を『社会構造論』で引き継いで、こう述べている」[2]とローウィからマードックに繋がる、核家族が世界的に普遍的な存在であるとの主張を再確認している。

トッド自身、アナール学派との接点があることを述べている。また、トッドは、マードックらと同じ視点を持っていたトッドの博士論文の指導教官であったピーター・ラスレット＜英歴史学者 1915-2001＞の核家族論に回帰したとも言える。論文提出後、トッドはラスレットと意見を異にして袂を分かっていたからである[3]。

トッドが『家族システムの起源』のなかで主張したかったことは、次の五つの点に集約できるように思われる[4]。

①起源的家族は、夫婦を基本的要素とする核家族型のものであった。

②この核家族は、国家と労働によって促された社会的分化が出現するまでは、複数の核家族的単位からなる親族の原地バンドに包含されていた。

③この親族集団は、女を介する絆と~~床~~男を介する絆を未分化的なやり方で用いていたという意味で、双方的であった。

④女性のステータスは高かったが、女性が集団のなかで男性と同じ職務をもつわけではない。

⑤直系家族、共同体家族その他の、複合的な家族構造は、これより後に出現した。その出現の順序は、今後正確に確定する必要があるだろう。

~~さて、~~以上の点を踏まえて、トッドに関して筆者が興味を持った点は以下の三点である。順に述べてみる。

第一に、これまで否定されていた伝播論がトッドにおいては復活している点である。筆者は人類学については専門家ではないが、人類学においては、進化論的視点に立った伝播論的人類学が非欧米圏を差別する視点を持つものとして否定されていたと理解している。伝播論を端的に述べると、文明の頂点にはヨーロッパがあり、アジアやアフリカ文明の進化が遅れており、いずれはヨーロッパ型になるというものであった。

当時の人類学者らは全く現地調査を行わずに理論を構築し、西洋優位主義を吹聴していた。これに対して 1920 年代にブロニスワフ・マリノフスキ（1884 – 1942 ポーランド出身の英人類学者）やラドクリフ・ブラウン（1881 – 1955 英文化人類学者）らが登場、前者はパプアニューギニアのトロブリアンド諸島、後者はインドのアンダマン島での長期にわたる現地調査を行った。その結果、両者に微妙な主張の違いはあるものの共通しているのは、

---

[1] 『家族システムの起源』上巻（エマニュエル・トッド著、藤原書店 2016 年 7 月 10 日出版石崎晴己監修訳）20 頁

[2] 同著、40 頁

[3] Wiki「エマニュエル・トッドの項」

[4] トッド前掲書上巻 51-52 頁

彼ら以前の人類学（進化論的・伝播論的）は正確ではなく、文化はそれぞれの文化内において異なる意味を持ち、かつ合理性があり、文明間に優劣の差はないというものであった。いわゆる西欧中心主義人類学を批判した構造主義的人類学であった。

トッドはこの一旦は否定された文化伝播論のような理論を復活させた。但し、文明の優劣という意味においてでは、もちろんない。核家族が伝播したという意味においてである。核家族の幾つかの様式は、ユーラシア大陸の中心部から周辺部へ向かって伝播したというのである。ヨーロッパにこそもっとも古代的（アルカイック）な核家族が存在し、そのために人類初の産業化＝工業化＝近代化は可能となったとしている。

ヨーロッパは家族社会学的には最も後進国であるという驚くべき逆転の発想をトッドは「中東もしくは中国に位置する中心から発して、父系的な家族形態が周囲へと伝播したという仮説をたてるなら、ヨーロッパ人は人類学的には原始的な人間ということになるだろう」[5]と皮肉たっぷりに述べている。

ヨーロッパに世界初の近代化＝産業化が発生したことを体系的に述べたのはマックス・ウェーバーである。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904 年）において、カルビニズムの生活態度（エートス）が資本主義の最初の投資循環を生み出したとの主張であった。その後のウェーバーの宗教社会学には、時代的な制約もあって西洋優位主義につながるものがあったことは否めない。伝播論的人類学もその系列を曳くと理解できる。

トッドの「中心部と周辺」という概念は、アメリカのマルクス主義社会学者イマュエル・ウォーラスティン（1930-）の「世界システム論」（大雑把に言えば、先進国＝資本主義国である中心部が周辺の第三世界を搾取する世界的なシムテム）を想起させるかもしれない。しかし、筆者は國學院大名誉教授で哲学者の竹内芳郎（1924 – 2016）の「辺境革命論」を思い起す。竹内はマルクス主義者でありながら、現実に適合した理論化を図るために修正マルクス主義の構築に尽力した。その結果、歴史論ではイギリスのアーノルド J・トィンビー（1889 – 1975）の「新社会の揺籃の地もしくは発祥地は、先行社会の発祥地から移動し、旧社会の辺境が新社会の中心となる」との指摘（『歴史の研究』1973 年中央公論社 91 頁）を現実に叶っているとして受け容れ、「周辺革命こそが各社会構成体間の遺構のほぼ通則となっていることは、ほとんど疑う余地がないかに思われる」[6]と述べている。

つまり、「或る社会構成体が成熟し切ったときには、そのなかにあってその構成体を変革すべき任を担った階級事態もまた、その構成体の爛熟した文化にその魂までしゃぶりつくされ、みずからの任を全うすることなくその社会構成体と没落の運命をともにすることがおおいからであろう」[7]と竹内は述べる。つまり、ある社会が成熟し、たとえ世界の中心となったとしてもその社会は没落し、新しい中心的社会は、その周辺から発生するというのである。トッドの指摘によれば、核家族が発祥したものの、父系的核家族制度へと桎梏化

---

[5] トッド前掲書上巻、47 頁
[6] 竹内芳郎『国家と文明』岩波書店、1985 年、82 頁
[7] 同上、81 頁

した「中央」ユーラシアに対し、まだ柔軟性を持ちかつ古代的な核家族制度が残っていた「辺境」の西欧において新たな資本主義制度に適応できる余地があったということになる。まさに「周辺革命論」である。

第二の点は、かつてフランス共産党員であった（1967 年～1969 年の間）[8]トッドが、核家族が近代の産物であるとのエンゲルス的な視点、つまり共産主義的家族観を否定している点である。既に述べたようにマルクス主義フェミニストはアリエスの『子どもの誕生』（原著 1960 年発刊）等を根拠に、中世ヨーロッパ期には現在のような子ども概念がなかったことが庶民の日常的な史料から「証明」されたとした。今日のような家族成員間、特に親子の親密性も近代に成立したものであるとした。トッドはこのマルクス主義的家族観を否定したのである。核家族は家族の始原から存在し、成員間の感情はおそらく今の様ではなかったと思われるものの、核家族自体は近代の産物ではないとした。これほど強力なマルクス主義家族~~閧~~観への批判はない。

三点目は、社会の基礎的構造は核家族であるという~~の~~、ある意味「古典的な視点」を強化している点である。これはアメリカで発生した機能主義社会学的な家族観でもある。トッドは核家族を 15 の形態に分類し、そうした核家族を根底に社会が形成されていると主張している。家族は、マルクスの史的唯物論が言う上部構造を規定する下部構造のような役割を果たしていると理解することもできよう~~が出来る~~。上巻序説においてトッドは、概ね、次のように述べる。イングランドの絶対的核家族は、親子関係は自由主義的であったが、平等の観念は強く、これがアングロ・サクソンの個人主義と政治的自由主義の基層となった。またパリ盆地の平等主義的核家族は、子どもたちの自由と平等を重んじており、これがフランス革命の基層となった。またドイツと日本で支配的な直系家族は、父親の権威と兄弟間の不平等を特徴とするが、これが自民族中心的な権威主義的イデオロギーを生み出した、つまり独裁政治をもたらしたということだろう[9]。

しかしトッドの共産主義理解について~~筆者~~は、やや疑問がある。トッドは共産主義国の地理的分布図と伝統的農民層の共同体家族の広がりが重なるとして、共同体家族が共産主義国家を作りだしたと述べる。その核家族（共同体的家族）の特徴は「権威と平等」であり、そのため共産主義国も「権威と平等」を特徴とするとしている[10]。しかし、共産主義国においては「権威」は存在せず、反対する者を暴力で排除する「剝き出しの権力」と、ソ連のノーメンクラツーラやその他の共産国における共産党員のみに許された「特権」など、不平等さが極めて突出しているように思われる。トッドは共産主義をまだ理想化している面があるのではないだろうか[11]。それはトッド最初の著作である『最後の転落』（1976 年）

---

[8] Wiki「エマニュエル・トッド」
[9] トッド前掲書上巻 18 頁
[10] 同著 17 頁
[11] 『世界像革命』（藤原書店 2001 年石崎晴己編）において、石崎晴己は「トッドに人類学の最大の目的が、マルクス主義的歴史学に対する反駁であることは、十分に示されたであろう」（47-48）と述べている。しかしトッドは『トッド、自身を語る』（石崎晴己編訳、藤

においてソ連の崩壊を、世界に先駆けて「予言」していたとしても、である。しかしながら、社会を根底で基礎づけているのは家族であるとの力強いトッドのメッセージは、家族の価値をことさら貶めようとする現代社会の社会学者の勢いをくじく大きな役割を果たすであろうことは間違いない。

３、家族研究の歴史概観 - トッドを参考に -

筆者はすでに『学際研究』69 号（日本学際会議 2015 年 10 月 1 日）所収の「『家庭の目的論的定義』構築の試み」において、インシスト・タブーに焦点を当てて家族研究の歴史を短くではあるが概観している。同論文の内容を繰り返すことは避けるが、簡単に流れを述べてみると家族研究はスイスの文化人類学者ヨハン・バッハオーフェン（1815 – 1887）の『母権制』（1861 年）から本格化する[12]。しかし現代家族社会学では母権制の存在が否定されているのは言うまでもない。バッハオーフェンの思想はアメリカの文化人類学者ルイス・モーガン（1818-1881）に継承され『古代社会』（1877 年）が刊行された。その思想はエンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』（1884 年）に継承されたが、前出の筆者論文において、それらの問題点を指摘した。

しかしトッドの指摘はもっと辛辣である。批判があまりに興味深いためその内容を紹介しよう。たとえばバッハオーフェンの『母権制』などは「あらゆる誤りの生みの親」[13]とまで批判している。その理屈は、当時、父系社会の中に生きていたバッハオーフェンは、女性を蔑視する傾向を持ち、過去の家族制度を劣ったものとして理解するために、劣った女性が権力を持つ社会と見做したと言うのである。「女性に好意的でないブルジョワ的雰囲気の中で研究を進めていたために…意味を持たない文書を大量に生産する、まさに精神の墓場となっていった」[14]とまで指摘する。

こうした内容を継承したモーガンの『古代社会』も激しいトッドの批判に晒される。トッドはモーガンが、「野蛮、未開、文明の三段階で人類は進化するとする人類学的進化論の絶頂に他ならない」[15]と辛辣に述べる。しかもモーガンは、その理論にニューヨーク州のイロコイ族が母系制であると詳しい説明を付け加えたことから事態はさらに悪化したという。イロコイ族は女性の指導者を有していたが母権制ではなく、悪い事にはアメリカインディ

原書店 2015 年）において、自身のフランス共産党時代を振り返っている。スターリン主義政党ではあったと批判しながらも、自身が所属していた細胞のメンバーは非常に思いやりのあるメンバーが多く人情的であったという（同著 59 頁以降）。青春時代の思い出として、sympathy を感じるというところだろうか。しかし理論については、マルクス主義経済学は神学と同じようなものであり、史的唯物論も歴史の事実とは異なるものの、階級分析については未だに有用だと感じているとも述べている（90-91 頁）。

[12] 末吉重人「『家庭の目的論的定義』構築の試み」『学際研究』69 号（日本学際会議 2015 年 10 月 1 日）2459 頁

[13] 同著下巻 505 頁

[14] トッド前掲書下巻 504 頁

[15] 同著下巻 506 頁

アン部族のすべてが母権制ではなかったからである。そしてエンゲルスはこの間違いをマルクス主義を正当化するために『家族、私有財産、国家の起源』を通じて据え付けたという[16]。

筆者が『学際研究 69 号』で扱わなかった家族研究史の人物として、トッドが挙げている人物のひとりはフレデリック・ル・プレイ（1806 – 1882）である。トッドの扱った学者はその他にも大勢いるが、筆者の印象に強い人物としてル・プレイを取り上げる。彼は社会調査や家族研究の発展に貢献したフランスの社会改革運動家であり、家族を社会の単位として考え、家計を中心とする社会調査を実施した。しかし他の家族社会学者らはあまり注目しなかったとトッドは言う。

ル・プレイは三つの家族類型を定義した。第一は「不安定（核）家族」（子どもの独立、遺産の均等分配によって家族は二代か三代で霧散する）、第二が「直系家族」（子どものうち一人が跡取りとして両親と同居する。だいたいは男児長子。末子相続もある。三世代家族を形成し、安定的な家族運営となる）、第三に「家父長（共同体）家族」（男児すべてが嫁を娶った後に両親と同居し、集団を形成する。女児は他家に嫁ぐ。）そして、核家族から直系家族へ、それから共同体家族へと移行したという[17]。

トッドによるとこのル・プレイの分類は長期に亘ってヨーロッパの家族分類のスタンダードになった。その理由は、家族類型が三分類になっているからだと言う。つまり、キリスト教の三位一体論の形式になっているため、崇拝の対象足り得たと皮肉る。しかし最終的にトッドは既に述べたように、ル・プレイの類型を継承しつつも核家族を 15 に分離した。

家族機能に関して言えば、第二次世界大戦直後、ジョージ・マードックの『社会構造』（1949 年）の核家族論において四つの家族機能論を発表した。マードック以降、文化遅滞説（物質文化と精神文化の発展の時間差によって社会問題が発生する）で著名なアメリカのウィリアム・オグバーン（1886 – 1959）が家族機能は、ほとんどの家事・育児等が外注化され、愛のみが残ったとの家族機能縮小説を主張、これにタルコット・パーソンズ（1902 – 1979）が反論して、①成人のパーソナリティの安定、②子どもの第一次社会化 - の二つの機能は残っているとした経緯がある。

４、家族機能弱体化につながる理論への批判

トッドの指摘は、家族機能を強化して健全な社会を再建することを妨げようとする上野千鶴子らのマルクス主義フェミニズムや山田昌弘らの主観主義的家族観への批判にもなっている。

核家族が近代の産物であるとしたマルクス主義フェミニズムに対しては、すでに述べたように、かつてフランス共産党員でもあり、現在もマルクスの階級理論への sympathy を持っているであろうと思われるトッドが、「核家族こそ家族システムの起源」であることを言

[16] 同著下巻 507 頁
[17] トッド前掲書上巻 64-65 頁

明していることで~~ため~~、すでに論破されたとみるべきだろう。

二つ目の主観的家族観は、家族という法的枠組みのなかでも自分が家族だと思う人を家族と考えていればいい（たとえばストレスが生じないための提案）と主張する。~~が、~~この点についても、トッドの言葉を引用して批判することが可能である。それはトッドの次のような表現である。「家族というものはひじょうに重要であり、社会の組織編成にとってはひじょうに中心的なものであるので、芸術のようにときとして支配の原則を逸脱することがある、では済まされないということを認めなければならない」[18]。

トッドは、この文章（テクスト）を過去に否定された手法である「伝播」との概念を再び用いる際の理由として述べているが、それは家族の成員を自分の気分（気持ち）で決めたらいいという、やや安易に聞こえる家族の定義への批判にもなると思われる~~筆者は感じた~~。社会を根底から規定する家族は、主観的にのみではなく、先ず客観的に規定されるべき重要な存在であると考えるべきであろう。それを前提として、ストレスとなる家族成員を家族と思わないようにしようとの主観的家族観の趣旨（筆者の理解するところによる）は、家族成員間の相互理解の問題であり、家族の定義の問題ではない。あくまでカウンセリングの対象であると考えるべきであろう。

５、さいごに

以上、述べたようにトッドの『家族システムの起源』は、我々の家族観を幾つかの点で補強する内容を有している。家族の起源が核家族であること、強い家族形態が三世代家族であること、そして家族が社会を支える最小単位であることなどである。

しかしトッドはマードックのように家族機能にまでは立ち入っていない。それは時代的制約がそうさせたかもしれない。家族の多様性との議論は、世間では自明のものとなっている。こうしたなかで、我々は三世代家族が愛の学校であり、健全な人間関係形成を訓練する場、善き家庭人となる準備をする場と理解している。今後そうした内容まで立ち入って議論する世俗的理論の探索の必要性を痛感する。

---

[18] 同著上巻 48 頁